

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18H00607

研究課題名(和文) 現代社会に生きる哲学教育を構築するための理論的・実践的研究

研究課題名(英文) Theoretical and practical research on philosophy education for the contemporary society

研究代表者

寺田 俊郎 (TERADA, TOSHIRO)

上智大学・文学部・教授

研究者番号：00339574

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,800,000円

研究成果の概要(和文)：初等・中等・高等教育において哲学教育がもたらす意義、教育方法、効果について、哲学的対話中心の教育について新たな知見を得るとともに、哲学的文章を書くことによる教育方法について知見を得た。また、市民教育・社会教育において哲学教育がもたらす意義、教育方法、効果について、地域における社会教育および企業の研修における哲学的対話中心の教育について新たな知見を得るとともに、哲学的テキストの活用について知見を得た。さらに、哲学教育に必要とされる指導者の資質や能力、養成方法、および哲学的対話を中心とする哲学教育と伝統的な哲学教育・研究との関係について、新たな知見を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

まず、本研究の社会的意義として、現代の学校教育、高等教育、社会教育、生涯教育の諸課題に取り組むための最も基礎的な教育のあり方について、建設的な新しい知見を示したことが挙げられる。しかし、本研究の意義は、たんに応用的・実践的なものに留まらない。本研究は、伝統的な学術分野である「哲学」および「教育学」における新たな学際的地平を示すことによって、両学術分野の自己内省を促すものでもあり、その点で学術的意義をもつ。

研究成果の概要(英文)：As to the significance, teaching methods and effects that philosophy education can bring about in primary, secondary and higher education, new perspectives have been acquired on the education methods centered around philosophical dialogue, as well as on the education method in terms of writing philosophical essays. As to the significance, teaching methods and effects that philosophical education can bring about in civic and social education, new perspectives have been acquired on the education methods centered around philosophical dialogue, as well as on the education methods in terms of reading philosophical texts. New perspectives have been acquired on qualifications and competencies of instructors of philosophy education and their training methods, as well as on the relationship between philosophy education centered around philosophical dialogue and traditional philosophy education.

研究分野：哲学、倫理学

キーワード：哲学 対話 教育 探求 子どもの哲学 哲学プラクティス 対話的で深い学び 現代社会

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

日本哲学会が設置している哲学教育ワーキンググループ(以下「哲学教育WG」)は、哲学教育の多様な意義と方法を研究して哲学教育の推進に資することを目的とし、2010年度より年次大会において哲学教育に関する公開ワークショップを毎年開催してきた。現代社会の課題に应答すべくそのテーマは多岐に渡る。これらワークショップを企画し実施するなかで、哲学教育を推進する際のさらなる課題が浮上してきた。

また、本研究の代表者は、2011～2013年度の科研費補助金研究「初等・中等教育における哲学教育推進のための理論的・実践的研究」の代表者として、初等・中等教育における哲学教育がもつ意義と有効性を確認するとともに、哲学的対話を中心とする教育プログラムを研究し、その成果に基づき、初等・中等学校において多様な哲学教育を継続して実践し、その有効性を検証するとともに教育方法を改良してきた。その後、初等・中等教育における哲学教育は国内においてさまざまな形で実施されるようになったものの、その普及は限定的であった。その理由は、先述のように、哲学教育の方法およびその意義が十分に理解されていないことにあると考えられる。さらに、代表者は日本学術会議の提言「未来を見すえた高校公民科倫理教育の創生—考える「倫理」の実現に向けて」の作成にも協力者として参画し、そのなかで、哲学教育の意義と方法をさらに明確化して教育現場に提示することの重要性を強く意識するようになった。

2. 研究の目的

本研究は、日本哲学会の哲学教育WGのメンバーが中心となり、哲学教育を、高等教育における専門教育や教養教育の現場のみならず、初等・中等教育の現場や現代社会のさまざまな現場で活用する意義と方法を研究し、現代社会の課題に応えることのできる哲学教育の基盤を構築することを目的とした。そのため、哲学的対話を中心とする哲学教育の意義および方法を明確化し、それに基づいて初等・中等・高等教育および市民教育・社会教育における教育プログラムを開発し、その妥当性・有効性を理論的・実践的に検証するとともに、指導者養成の方法を研究した。以上を通して、本研究は、哲学の知を現代社会に生かすための哲学教育のあり方を探究すべく活動してきた哲学教育WGの活動をさらに強力かつ広範に展開し、現代社会に生きる哲学教育を推進するための理論的・実践的に妥当な方法を構築することを試みた。

3. 研究の方法

本研究は以下の四つの課題を掲げ、それぞれを研究する方法を以下のように定めた。

課題1：初等・中等・高等教育において哲学教育がもつ意義を明確にし、それに資する教育方法を開発し、その効果を明示する。課題2：市民教育・社会教育において哲学教育がもつ意義を明確にし、それに資する教育方法を開発し、その効果を明示する。課題3：上記の哲学教育に必要とされる指導者の資質や能力を明らかにし、その養成方法を開発する。課題4：哲学的対話を中心とする哲学教育と伝統的な哲学教育・研究との相互関係を明確にする。

課題1の研究方法：代表者・分担者各自がすでに実践している学校教育における対話を中心とする哲学教育を継続するとともに、広く同種の実践例およびそれらに関する理論的研究を調査した。特に新設の教科「道徳」(小・中学校)および「公共」(高等学校)における哲学教育の活用を優先課題とし、集中的に取り組んだ。並行して海外の先進的研究・実践の調査・研究も行った。

課題2の研究方法：代表者・分担者各自がすでに実践している市民教育・社会教育における哲学教育を継続するとともに、広く同種の実践例およびそれらに関する理論的研究を調査した。並行して海外の先進的研究・実践の調査・研究も行った。

課題3の研究方法：すでに実施されている哲学的対話の指導者養成の事例を調査・分析するとともに、課題1および課題2の研究成果に基づいて指導者に求められる資質を同定し、それを養成する方法を研究した。

課題4の研究方法：哲学および対話に関する哲学的理論を研究して課題1および課題2の教育方法の理論的基盤を明らかにするとともに、課題1および課題2の哲学教育、さらには課題3の指導者養成における哲学理論研究や哲学史・思想史研究の役割を明らかにし、課題1～3に還元することを試みた。

4. 研究成果

(1) 初等・中等・高等教育において哲学教育がもつ意義、教育方法、効果について、哲学的対話を中心とするワークショップ型の教育について新たな知見を得るとともに、哲学的文章を書くことによる教育方法についても知見を得た。

初等教育における哲学教育では、哲学的対話を中心とするワークショップ型の教育が、何よりもまず新しい学習指導要領が掲げる「対話的で深い学び」を実現する方法として有効である。その方法としては、哲学的対話の授業を諸教科から独立に(たとえば総合的な探求の時間などに)設けることによって、対話を通じて自律的に考えるとともに共同的に考えること、批判的に考え

るとともに創造的に考えることを体得することが主になるが、各教科の中に哲学的対話の時間を設けることによって、各教科の学習内容を直接的に深めることもできる。特に「道徳」においては哲学的対話を中心とする授業が有効である。

中等教育における哲学教育では、初等教育の場合と同様、哲学的対話を中心とするワークショップ型の教育が、新しい学習指導要領が掲げる「対話的で深い学び」を実現する方法として有効である。その方法として、哲学的対話の授業を諸教科から独立に（たとえば総合的な探求の時間などに）設けることによって、自律的、共同的、批判的、創造的に考えることを体得することと並んで、各教科の中に哲学的対話の時間を設けることによって、各教科の学習内容を直接的に深めることもできる。特に「道徳」、公民科「公共」および「倫理」においては哲学的対話を中心とする授業が有効である。公民科の授業においては古典テキストの熟読と哲学的対話を組み合わせた方法が特に有効である。

高等教育における哲学教育は、専門教育としての哲学教育と教養教育としての哲学教育に分けて考えることができる。専門教育としての哲学教育においては、哲学の理論、歴史、哲学の古典テキストの読解、二次文献の扱いなど、従来型の哲学教育が重要であることは言うまでもないが、人が生きる中で遭遇する身近な哲学的問を必ずしも哲学の素養をもたない人々と対話しつつともに考える経験が学術的な学修を深めるためにも有効である。

初等、中等、高等教育いずれにおいても、正規の授業での哲学教育の他に自由な課外活動としての哲学的対話を実施されてよい。真の意味での哲学的対話は正規の教育から離れた自由空間の中でしか成立しないという意見もある。この意見に対して、本研究の代表者は、一定の意義を認め、哲学的思考のための自由空間の必要性を認めつつも、むしろ学校教育改革の視点から、積極的に学校教育において哲学教育を実施することを主張する。

2019年度終わりより急速に広がった新型コロナウイルス感染症のため、授業実践、研究会、学会などの対面での実施がほぼ不可能になり、研究の進捗に大きな支障をきたしたが、止むなく実施したオンラインでの授業、研究会、学会の経験から、オンラインでの教育方法も独自の有効性をもつことが判明した。

(2) 市民教育・社会教育において哲学教育がもちうる意義、教育方法、効果について、地域における社会教育および企業の研修における哲学的対話を中心とするワークショップ型の教育について新たな知見を得るとともに、哲学的テキストの活用についても知見を得た。

地域における社会教育で哲学的対話を中心とするワークショップ型の教育がもちうる意義は多様であり、市民性の涵養、地域社会の問題を考える場の提供、国内外の社会問題を考える場の提供、多文化・多世代交流を通じた地域づくりなどがある。哲学的対話は対話（コミュニケーション）の技法と作法を習得することにたいへん適しているが、それが市民性の涵養の第一歩となる。また、哲学的対話を通じて物事を深く掘り下げて考える習性を養うことは、地域社会や国家社会の問題を巡る熟議の下地になる。さらに、哲学的対話は多文化および多世代の人々を結びつける力をもつ。

企業研修においても同じことが言える。市民社会における企業の役割を考えること（メセナ、SDGs など）はもちろんだが、各企業が直面する問題を考える場を提供することも可能である。また、個々の企業人が教養を高めることによって個々の企業の文化を高めるという考え方があがるが、その最も基礎的な教育として哲学的対話を中心とする教育は有効であり、この目的のためには哲学の理論や概念の理解も同じく有効である。

(3) 哲学教育に必要とされる指導者の資質や能力、養成方法について新たな知見を得た。特に哲学の理論や歴史に関する知識の位置づけに関する新たな知見を得た。

教育機関、市民社会、企業などで哲学的対話を中心とする哲学教育を推進していくためには、哲学的対話を企画し実施する能力をもった指導者の養成が不可欠である。なかでも実際に哲学対話を進行する技量をもった進行役の要請は最優先の課題であるが、その解決は容易ではない。まずは哲学的対話は何であるかを理解し、哲学的対話の手順を習得することから始めるしかないが、それらにいくら習熟してもよい進行役になれるわけではない。進行役自身が一人の対話者として哲学的対話に参加し、一人の進行役として哲学的対話を進行する経験を積むことによって、技量を身につけていくしかない。哲学的対話を推進する市民団体の中には良質の進行役養成講座を提供しているところもあるが、やはり、哲学対話の基本的理解をもち基本的手順を学んだ進行役が、一定の経験を積んだ後で、それを踏まえてさらに修練を積む教育手順を取っている。

学校教育で「対話的で深い学び」を実現することを考えるならば、すべての教員が哲学的対話に関する基本的な理解をもち、哲学的対話を進行する基本的技量をもっていることが望ましい。そこで、教員養成課程に哲学的対話の進行に関する教育を組み込むことを提案したい。

哲学的対話の指導者の養成に関する一つの論点は、哲学の理論や歴史の知識が哲学的対話の企画と実施とどのような関係にあるか、というものである。一つはっきりしているのは、哲学の理論や歴史を知らなくても、哲学的対話を巧みに進行することは可能だということ、そして、哲学の理論や歴史をよく知っていても、哲学的対話を巧みに進行できるとは限らないということである。しかし、一般的に、哲学の理論や概念の知識は哲学的対話の進行に有益に作用する。その理由は容易に推察される。児童、生徒、市民の発する問の哲学的意味を理解し、その問をめぐる対話参加者の意見を理解し、対話を建設的な方向に向けるために、哲学の理論や概念の知識が役立つからである。哲学の理論や概念の知識は必須ではないとしても有益であるといえる。

(4) 哲学的対話を中心とする哲学教育と伝統的な哲学教育・研究との関係について、新たな

知見を得た。

哲学的対話を中心とする哲学教育と伝統的な哲学教育・研究との関係の一つの側面は、(1)で触れた専門教育としての哲学教育と哲学的対話を中心とする哲学教育の関係に関わる。もう一つの側面は、(2)で触れた哲学の理論や概念が哲学的対話とどのように関係するかに関わる。上述のように、本研究の代表者は両者の間には密接な関係があり、互いに肯定的な影響を与えあうと考えているが、この点は研究分担者間で意見が異なることを言い添えておかなければならない。

その意見の相違は、言うまでもなく、「哲学とは何か」という問に対する答の相違による。研究代表者は哲学とは対話を通じた真理の探究であり、人間と人間を取り巻く世界に人間が見出さずにはいない問を共に考え、答を共に探していく営みである。しかし、そのような真剣な真理探究の営みには、いくつかの副次的な効果がある。それが、(1)～(3)で述べた哲学的対話の様々な効用である。それらの効用こそが哲学的対話にとって重要だと考える研究者・実践者もいる。しかし、研究代表者は、そのような効用は、哲学的対話が哲学的な真理探究として遂行される場合にのみ、その真の効用を発揮すると考える。

その意味で、哲学的対話を中心とする哲学教育と伝統的な哲学教育とは、互いの意味を照らし出しあう関係にある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計21件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 12件）

1. 著者名 寺田俊郎	4. 巻 1181
2. 論文標題 アンスコム論説「トルーマン氏の学位」をめぐる	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 73-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kajitani, Shinji	4. 巻 04 nov 2022
2. 論文標題 “ Think Together, Be Together: Inclusive Philosophy and the New Principle of Community ”	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Psyche y Techne: Sospechas sobre una Relacion Intrincada, Bitacora de la BVF	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 河野哲也	4. 巻 50
2. 論文標題 哲学とは何か	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現代思想 特集：哲学のつくり方 もう一つの哲学入門	6. 最初と最後の頁 72-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 望月太郎	4. 巻 1
2. 論文標題 発展途上国における教育開発のための哲学プラクティス：国際協力と哲学へのニーズ、カンボジアでの実践から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 思考と対話	6. 最初と最後の頁 57-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 村瀬智之	4. 巻 57
2. 論文標題 「子どもの哲学」を基礎とした哲学対話の授業	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 平成30年度都倫研紀要	6. 最初と最後の頁 67-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西山溪・村瀬智之・小川泰治	4. 巻 2
2. 論文標題 子どもの哲学と民主主義－選好の変化とコンセンサス形成を可視化するワークの開発と実践	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 思考と対話	6. 最初と最後の頁 26-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 一ノ瀬正樹	4. 巻 474
2. 論文標題 放射線被ばく問題から新型コロナウイルス問題へ - 合理的に認識する責任 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 エネルギーレビュー	6. 最初と最後の頁 38-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 一ノ瀬正樹	4. 巻 63
2. 論文標題 放射線被ばく問題と「信念の倫理」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ATOMO 日本原子力学会誌	6. 最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 一ノ瀬正樹	4. 巻 11
2. 論文標題 「信念の倫理」研究序説	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要 The Basis	6. 最初と最後の頁 29-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 寺田俊郎	4. 巻 3
2. 論文標題 ソフィア哲学カフェオンライン哲学カフェ元年	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 グローバルコンサーン	6. 最初と最後の頁 268-270
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 寺田俊郎	4. 巻 4
2. 論文標題 オンライン哲学対話は続く 「ソフィア哲学カフェ」「シネマ哲学カフェ」報告	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 グローバルコンサーン	6. 最初と最後の頁 176-180
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 一ノ瀬正樹	4. 巻 第1139号
2. 論文標題 高校新科目「公共」についての哲学的覚え書き	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『思想』	6. 最初と最後の頁 139-164.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河野哲也	4. 巻 第7号
2. 論文標題 対話的思考の真理 「子どもの哲学」をめぐる思想史的考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 子ども学	6. 最初と最後の頁 45-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村瀬智之・土屋陽介	4. 巻 第69号
2. 論文標題 「子どもの哲学」が問いかけるもの その教育理論と哲学的問題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 哲学	6. 最初と最後の頁 90-100
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田圭一	4. 巻 第46巻 1号
2. 論文標題 言葉の意味の変化をもたらす体験とはどのようなものか ウィトゲンシュタインの比喩的表現の考察をもとに	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 科学基礎論研究	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 寺田俊郎	4. 巻 第69号
2. 論文標題 哲学 の多様な可能性をひらく 哲学教育ワークショップの試み	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 哲学	6. 最初と最後の頁 53-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀越耀介	4. 巻 第1巻第1号
2. 論文標題 第 24 回世界哲学会議参加報告 子どもの哲学 (P4C) 関連のセッションを中心として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 思考と対話	6. 最初と最後の頁 62-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 寺田俊郎	4. 巻 第5号
2. 論文標題 ソフィア哲学カフェ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 グローバルコンサーン	6. 最初と最後の頁 188-189
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 寺田俊郎	4. 巻 第74号
2. 論文標題 哲学教育ワークショップ「市民社会の質を向上させる要素としての哲学教育」報告	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 哲学	6. 最初と最後の頁 91-97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 寺田俊郎	4. 巻 第72号
2. 論文標題 哲学教育ワークショップ「専門職教育に生きる哲学教育」報告	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 哲学	6. 最初と最後の頁 49-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Terada, Toshiro	4. 巻 第47号
2. 論文標題 Human Rights and Personal Dignity	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Philosophical Studies	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計37件 (うち招待講演 20件 / うち国際学会 10件)

1. 発表者名 Terada, Toshiro
2. 発表標題 Now is the time philosophical dialogue is desperately needed in Japanese society: in hope of developing a sound democratic political culture
3. 学会等名 2022 International Conference on Philosophy with Children (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 金澤正治・河野哲也
2. 発表標題 小学校道徳科における対話的方法の道徳的效果について
3. 学会等名 第20回子どもの哲学国際学会 (ICPIC2022) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 MORIOKA, Chiho and KONO, Tetsuya
2. 発表標題 Safety and Authority in Moral Education through Dialogue
3. 学会等名 第20回子どもの哲学国際学会 (ICPIC2022) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山田圭一
2. 発表標題 「公共」的な見方とは何か 学習指導要領を哲学的に問い直す
3. 学会等名 第73回日本倫理学会WS
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 望月太郎
2. 発表標題 カンボジアにおける教育開発のための哲学プラクティス
3. 学会等名 大学評価学会第17回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kono, Tetsuya and Chiho Morioka
2. 発表標題 The Balance between psychological and intellectual safety in philosophy for children: The drawback to Japan's "culture of concern"
3. 学会等名 The 19th Biennial ICPIC (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tokui, Chiaki and Kono, Tetsuya
2. 発表標題 How could P4C be linked to each subject?: A case for P4C efforts incorporating creative activities
3. 学会等名 The 19th Biennial ICPIC (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nishiyama, K., Murase, T., & Ogawa, T.
2. 発表標題 Community of Philosophical Inquiry without Consensus?: Insights from Meta-Consensus
3. 学会等名 The 19th Biennial ICPIIC (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山田圭一
2. 発表標題 学校で学ぶ知識に価値はあるのか? - 新学習指導要領を認識論的に分析する -
3. 学会等名 日本科学哲学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Toyoda, Mitsuyo
2. 発表標題 Can we teach values by practicing p4c?: how Japanese teachers try to grow p4c in moral education
3. 学会等名 The American Philosophical Association Pacific Division 93rd Annual Meetin (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kono, T., Nishikawa, K., Tsuchiya, Y., Toyoda, M.
2. 発表標題 Repertoires of philosophical inquiry: A practical application of P4C for various purposes
3. 学会等名 The 19th Biennial ICPIIC (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 齋藤元紀・染谷昌義・永戸哲也・松丸修三・笹金光徳
2. 発表標題 10年間大きな変更のなされなかった初年次教育プログラムの改革の検討と実践 全学共通初年次教育科目「ゼミ」と「タカチホセーフティネット」を中心に
3. 学会等名 初年次教育学会第12回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 和田倫明
2. 発表標題 哲学・倫理の内容を活かしたコンテンツベースの授業案
3. 学会等名 日本哲学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 神戸和佳子
2. 発表標題 哲学は公民科教育のために何ができるか
3. 学会等名 日本哲学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本智也
2. 発表標題 新科目「公共」における哲学教育の実際
3. 学会等名 日本哲学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小嶋恭道
2. 発表標題 新科目「公共」について考える 別の仕方でも考えることと批判
3. 学会等名 日本哲学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 一ノ瀬正樹
2. 発表標題 高等学校新科目「公共」を考える 哲学・倫理学を生かすために：導入
3. 学会等名 日本哲学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 一ノ瀬正樹
2. 発表標題 「考える」ことをめぐる三つのコントラスト（＜考える力＞とは何か？ 思考の教育における哲学系諸学の役割）
3. 学会等名 日本学術会議第一部会哲学委員会哲学・倫理・宗教教育分科会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 上村崇・桑原直己
2. 発表標題 初等・中等教育に対する倫理学の貢献可能性
3. 学会等名 日本倫理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 上村崇
2. 発表標題 「倫理教育・道徳教育の正当性の基盤を問う 応用倫理学（教育倫理）の立場から」
3. 学会等名 日本倫理道徳教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 齋藤元紀
2. 発表標題 「対話が開くリアルとヴァーチャル 哲学における理論と実践の観点から」
3. 学会等名 比較文明学会研究例会.
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 齋藤元紀
2. 発表標題 シンポジウム「日本における「哲学プラクティス」とは何か？」
3. 学会等名 日本哲学プラクティス学会.（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 村瀬智之
2. 発表標題 シンポジウム「日本における「哲学プラクティス」とは何か？」
3. 学会等名 日本哲学プラクティス学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 望月太郎
2. 発表標題 カンボジアにおける教育開発のための哲学プラクティス。
3. 学会等名 大学評価学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 寺田俊郎
2. 発表標題 Philosophy as a way to cultivate humanity and power of judgment in Japan and East Asia
3. 学会等名 The 24th World Congress of Philosophy (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 寺田俊郎
2. 発表標題 Is a dialogue-oriented ethics meaningful or even possible in Japanese society?
3. 学会等名 Workshop; Kritischer Theorie und kultureller Differenz in Japan und Deutschland“ (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Stephen Palmquist
2. 発表標題 Teaching Philosophy to Non-Majors: Twelve Words to Guide the Way
3. 学会等名 日本哲学会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 土屋陽介
2. 発表標題 子どもの哲学（哲学対話）の手法を取り入れた大学での哲学教育の可能性
3. 学会等名 日本哲学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 左金武
2. 発表標題 思考の技術と哲学の教育的意義
3. 学会等名 日本哲学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 榊原哲也
2. 発表標題 看護教育に生きる哲学
3. 学会等名 日本哲学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 金光秀和
2. 発表標題 技術者教育と哲学の役割
3. 学会等名 日本哲学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井尻貴子・川辺洋平
2. 発表標題 企業での哲学対話について
3. 学会等名 日本哲学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 永井玲衣、前田有香、 幡野雄一
2. 発表標題 教科書と哲学対話を組み合わせた道徳科教育：コロナ禍でのオンライン実施
3. 学会等名 日本哲学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中川雅道
2. 発表標題 学校と教科書と教員と：本当に学校は教育的なのか？
3. 学会等名 日本哲学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山内志朗
2. 発表標題 アメリカにおける公民教育について
3. 学会等名 日本哲学会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 川崎唯史
2. 発表標題 国際交流協会における哲学対話
3. 学会等名 日本哲学会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 麻生淳一
2. 発表標題 地域における社会教育と哲学カ フェ
3. 学会等名 日本哲学会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計20件

1. 著者名 子ども図書館司書 + NPO法人アーダーコード編, 河野哲也監修	4. 発行年 2023年
2. 出版社 アルパカ	5. 総ページ数 120
3. 書名 こどもたちが考え、話し合うための絵本ガイドブック	

1. 著者名 河野哲也[監修]、菅原嘉子[文・構成]、ながしまひろみ[絵・漫画]	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ポプラ社	5. 総ページ数 127
3. 書名 哲学のメガネで世界を見ると まんがで哲学 キミは学校に行きたい？	

1. 著者名 Kono, Tetsuya and Shimizu, Shogo, Toyoda, Mitsuyo (co-author, ed. Chi-Ming Lam)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 208
3. 書名 Philosophy for Children in Confucian Societies: In Theory and Practice	

1. 著者名 山田圭一（共著、納富信留、檜垣立哉、柏端達也編著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 232
3. 書名 『よくわかる哲学・思想』	

1. 著者名 豊田光世（共著、野澤令照編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東京書籍	5. 総ページ数 119
3. 書名 子どもの問いでつくる道徳科：実践事例集	

1. 著者名 上村崇（共著、竹田俊彦監修編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 いじめはなぜなくなるのか	5. 総ページ数 262
3. 書名 ナカニシヤ出版	

1. 著者名 豊田光世	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明治図書	5. 総ページ数 173
3. 書名 p4cの授業デザイン：共に考える探究と対話の時間のつくり方	

1. 著者名 河野哲也、寺田俊郎、齋藤元紀、村瀬智之（共著、河野哲也編、得居千晶、永井玲衣編集協力）『ゼロからはじめる哲学対話 哲学プラクティスハンドブック』、ひつじ書房、2020年10月	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 376
3. 書名 ゼロからはじめる哲学対話 哲学プラクティスハンドブック	

1. 著者名 河野哲也	4. 発行年 2021年
2. 出版社 河出書房新社	5. 総ページ数 288
3. 書名 じぶんで考え じぶんで話せる：こどもを育てる哲学レッスン（改訂新版）	

1. 著者名 河野哲也（共著、犬てつ編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Landschaft	5. 総ページ数 268
3. 書名 こどもと大人のとつがくじかん てつがくするとはどういうことか?（犬てつ叢書（1））	

1. 著者名 一ノ瀬正樹	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミュー	5. 総ページ数 372
3. 書名 いのちとリスクの哲学 - 病災害の世界をしなやかに生き抜くために、株式会社ミュー、2021年3月11日、372頁	

1. 著者名 寺田俊郎（編著）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 346
3. 書名 哲学対話と教育	

1. 著者名 東琢磨・川本隆史・仙波希望編著、上村崇ほか著	4. 発行年 2018年
2. 出版社 月曜社	5. 総ページ数 432
3. 書名 忘却の記憶：広島	

1. 著者名 河野哲也・土屋陽介・村瀬智之・神戸和佳子・松川絵里	4. 発行年 2018年
2. 出版社 毎日新聞出版	5. 総ページ数 184
3. 書名 この世界のしくみ 子どもの哲学2	

1. 著者名 梶谷真司	4. 発行年 2018年
2. 出版社 幻冬舎	5. 総ページ数 262
3. 書名 考えるとどういふことか 0歳から100歳までの哲学入門	

1. 著者名 河野哲也	4. 発行年 2019年
2. 出版社 童心社	5. 総ページ数 252
3. 書名 対話ではじめる子どもの哲学 道徳ってなに? (全四巻)	

1. 著者名 牧野英二・小野原雅夫・山本英輔・齋藤元紀編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 297
3. 書名 哲学の変換と知の越境 伝統的思考法を問い直すための手引き	

1. 著者名 東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会。(坂口克彦・村野光則・和田倫明編著、村瀬智之ほか著)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 清水書院	5. 総ページ数 200
3. 書名 「公共の扉」をひらく授業事例集	

1. 著者名 文部科学省(山田圭一ほか)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東京書籍	5. 総ページ数 239
3. 書名 高等学校学習指導要領(平成三十年告示)解説 公民編	

1. 著者名 寺田俊郎	4. 発行年 2019年
2. 出版社 現代書館	5. 総ページ数 221
3. 書名 どうすれば戦争はなくなるのか カント『永遠平和のために』を読み直す	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>新型コロナウイルス感染拡大のため繰り越した研究費によって2023年3月に3回の国際研究集会を開催した。 International Lecture Session on Philosophical Practice: Philosophical Practice and Phenomenology International Workshop on Philosophical Practice: Philosophical Practice and Care Philosophical Practice in Scandinavia and the Community of Wonder as an Epicenter in Philosophical Practice</p>

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	豊田 光世 (Toyoda Mitsuyo) (00569650)	新潟大学・佐渡自然共生科学センター・准教授 (13101)	

6. 研究組織 (つづき)

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	村瀬 智之 (Murase Tomoyuki) (00706468)	東京工業高等専門学校・一般教育科・准教授 (52601)	
研究分担者	一ノ瀬 正樹 (Ichinose Masaki) (20232407)	武蔵野大学・グローバル学部・教授 (32680)	
研究分担者	直江 清隆 (Naoe Kiyotaka) (30312169)	東北大学・文学研究科・教授 (11301)	
研究分担者	山田 圭一 (Yamada Keiichi) (30535828)	千葉大学・大学院人文科学研究科・教授 (12501)	
研究分担者	望月 太郎 (Mochizuki Taro) (50239571)	大阪大学・文学研究科・教授 (14401)	
研究分担者	梶谷 真司 (Kajitani Shinji) (50365920)	東京大学・大学院総合文化研究科・教授 (12601)	
研究分担者	齋藤 元紀 (Saito Motoki) (50635919)	高千穂大学・人間科学部・教授 (32637)	
研究分担者	上村 崇 (Uemura Takashi) (50712361)	福山平成大学・福祉健康学部・教授 (35411)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	河野 哲也 (Kono Tetsuya) (60384715)	立教大学・文学部・教授 (32686)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計7件

国際研究集会 子どもの哲学国際研究会2020	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 子どもの哲学国際研究会2021（オンライン）	開催年 2020年～2020年
国際研究集会 子どもの哲学国際研究会2022（オンライン）	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 The 24th World Congress of Philosophy: Round Table: Philosophy Education in East Asia	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 日本哲学会哲学教育ワークショップ「高等教育における哲学教育の意義と方法 一般教育・教養教育に焦点を当てて」	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 Philosophy for/with children as a way of World Philosophy	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 Workshop of Philosophy for/with Children conducted by Prof. Laurance Splitter and Prof. Walter Kohan	開催年 2018年～2018年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関